コンニチワ神戸〈5〉

＝インド＝

山本通りのインドクラブのガンジー胸像

L. D. ジャベリーさんと M. パテラさんを訪ねて

神戸には六十カ国の人たちが生活をしている。街角で世界各国の人たちが様々な言葉で挨拶を交わし、ことあるごとにそれぞれのお国ぶりのアレコレを披露してくれる。彼らのなかには商用などで短期間だけ神戸に滞在する人たちも多い。が、すっかり神戸にとけ込み、神戸っ子の一員となってしまった人たち、神戸を愛し、神戸での生活を愛するいわば〝エトランゼ神戸っ子〟も多いのだ。そんな彼らの生活ぶりを紹介することにしよう。

今月はインド人を取材することとなった。神戸市内には約千人のインド人が住んでいる。特に生田区は群を抜いている。北野町、山本通りを歩くと必ずサリー姿の女性に出会うといってもいい。なかにはターバンを巻いた紳士もいる。。

そこで、二人の人にインタビューすることにした。

◇

L・D・ジャベリー（L.D. Jhaveri）さん（「ユニバーサル・パール・コーポレーション」代表者）を神戸市内にあるオフィスで取材した。ここはヨーロッパ、特にドイツ、フランスへ養殖真珠を輸出している。

ジャベリーさんの日本語の会話は流暢だ。だが、読み書きはできない。これはジャベリーさんだけではない。大方のインド語と日本語は文法の構造が似ているので、会話の勉強はたやすいけれど、書くことは非常に難しいということだ。

さて、ジャベリーさんは一九一七年インドのボンベイに生まれた。そこはインドの西海岸に位置し、平均気温はカッ氏80度、大阪市程度の人口を擁する港都である。インドの都市生活は日本のそれと大した違いはない。けれども、田舎へ行くとかなり違って来る。大ていのインドの田舎ではまだ電気が来ていないし、水は井戸水、そして日本のように道はよくない。

ジャベリーさんが初めて神戸へ来たのは一九五十年。機械と真珠の買い付けのためにであるが、その10年前からインドで真珠の仕事をやっていた。現在の場所には19

年前から住んでいる。

「私はこの25年間に直接に日本の著しい経済成長と発展を見ることができました。一例を挙げると、一九五十年当時、タクシーは非常に少なく、また、その大ていはガソリンのかわりに木炭で走っていました」というジャベリーさんの目には来神以来の日本の経済成長が瞠目すべきものとして映っているらしい。

左よりジャベリーさん、長男でひとりっ子のP.L.ジャベリー君奥さん

一九五十年といえば第二次世界大戦が終焉してわずか五年。「第二次世界大戦は日本とインドとの間に何らの悪感情も引き起こさなかった。いや、より正確にいえば二国間の交流はインド解放の父、故チャンドラ・ボースの力によってより強められました。引き続きこの関係はよくなり続けています。加えるに多くの経済援助が日本からインドに与えられ、また、特筆すべき多くの人的援助もありました。例えば、ニューデリー近くの日本アジア救ライセンターという機関が一九六十年からレプラ患者の治療のため病院を運営していますが、日本の医者がスタッフとして働いています」ジャベリーさんは日本とインドの友好関係を強調する。

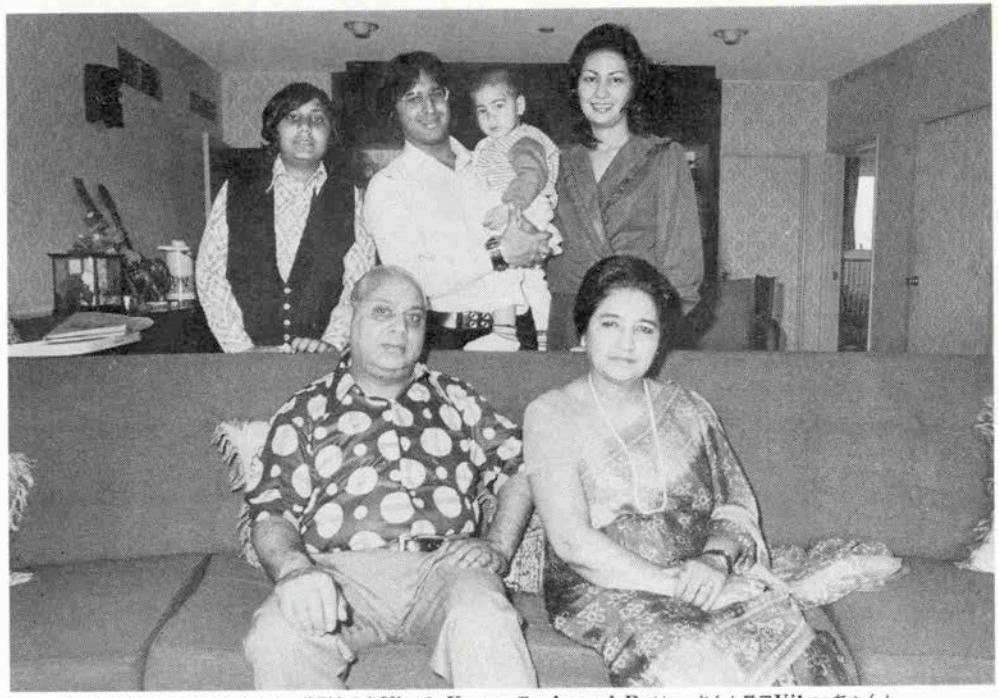
◇

神戸にはインドクラブと名のつくところが二カ所ある。一つは山本通り、もう一つは青谷にある。山本通りのインドクラブは一九二十年、在神インド人の手によって建設された。七十年の創立50周年記念祝典のときには、ジャベリーさんはこの会長を勤めていた。このときには当時の金井元彦兵庫県知事、宮崎辰雄神戸市長らを招いて式典が行われた。また、同年の日本万国博覧会のときはお偉ら方とのパーティも多く忙しかったそうだ。

毎年11月はインドの正月に当る。このとき在神インド人はインドクラブ（山本通り）に集って新年の祝賀パーティーを開催する。ただ、元日は暦の関係で毎年変わるということだ。この日、インドの宗教の話があったりみんなで食べたり飲んだりして新年を祝う。

また、1月26日の独立記念日にもインドクラブで、日本政府関係者、出入国管理事務所職員などを招いて記念のレセプションが行われるし、毎年4月には神戸日印文化協会（これについては後述）主催で「日印文化交歓会」が兵庫県民会館で開かれ、在神インド人が集う。外人クラブで行われる運動会などもみんなで楽しむということだ。

◇



前列左よりパテラさんと奥さん。後列左よりVivek Kumar君、Anmol Rattanさんと長男Vikasちゃんと奥さんのHemlataさん

ジャベリーさんは海よりも山が好きで「海と山とが近い神戸は美しいまちだ。自動車でなら30分あれば再度山の修法ケ原や六甲山へ行けるし、早起きする者にとっては、山から流れて来る小川の傍を散策できる諏訪山の山道は最も快適な場所ですね。再度山の登山道には朝早くから開いている茶店がありますが、そこで一服するのは楽しいです」というように、若い頃は毎朝、五時か六時頃から諏訪山の山道を歩いたそうで、今でもこの場所が一番好きということだ。もちろん今でも山を歩く。朝クルマで再度山の登山口まで行く。そこから山道を歩いて茶店へ寄るのだ。他にはテニスが好きで、これは磯辺通りの外人クラブでやる。ドライブも好き。仲々 健康的な 趣味 の持ち主だ。

ジャベリーさんの悩みの種は日本の湿気らしい。実際よりも夏が暑く感じられるのは乾燥したインドの夏を知っているからだろう。

◇

インド人の家庭料理としては、ダルスープ（これは野菜を煮込みドロッとさせた一見野菜カレーのような料理だが、ピリピリとした辛さはない）、いため野菜、インドパン、ヨーグルトなどがポピュラーだ。また、ミルクいっぱいのお菓子。これは一口食べるとミルクの味が口いっぱいに広がるクッキーで他では味わえない。ジャベリーさんは日本料理も好きで、焼き鳥と刺身も好物。

インド人が経営するレストランに「ゲイロード」がある。神戸市役所前の日本生命ビル地階にあり、ラリット

・モハン・パント（L.M. Pant）さんがマネージャーで、本場のインド料理が味わえる。日本人の経営だが、中山手通りの「デリー」は大衆向きのレストランで、インド人にも人気がある。

◇

次に取材したのはマダンラール・パテラ（M.Pathela）さん（「エス・ピー・ブラザース」代表者）。繊維関係の仕事でオフィスは大阪の本町にある。住まいは山本通り。そこへ取材に伺う。ジャベリーさん同様日本語は流暢である。会話は商売をするなかで友だちから学んだという。書く方は片仮名が少しとか。

一九一七年インド北部の生まれ。神戸へは三六年二月に初めて来たが、それまでもインドで繊維関係の仕事をしていた。神戸では磯辺通りの八幡神社の近くに住んでいた。当時、このあたり、現在の神戸国際ホテルからニューポートホテル、税関まではインディアンタウンと呼ばれていたほどインド人が多かったそうで、神戸中で二千人住んでいた。ところが、一九四十年、第二次世界大戦が始まるに及んで様相が一変した。パテラさんも同年秋インドへ引き上げた。

インドのまつりに登場する人形

再び来神したのは一九五十年。ジャベリーさんが初めて神戸へ来た年だ。このときには夫人同伴。ところが、元の居住場所に立ったパテラさんが見たのは、空襲によって何もなくなったまちであった。オフィスももちろんなくなっていた。そこで山本通りに住居を構え、再び繊維商として仕事を始めたパテラさんだが、現在は東南アジア方面に向けての輸出が殆んどだという。

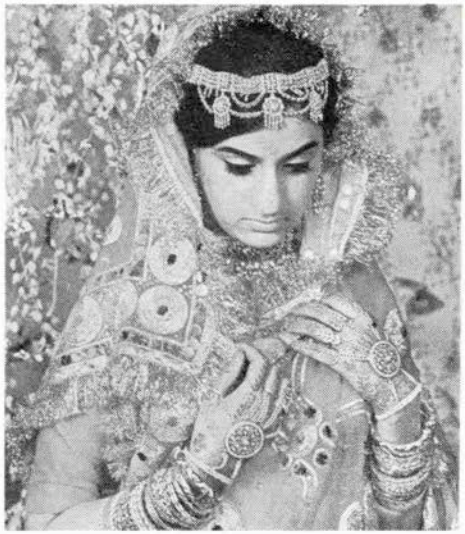
かっては日本とインドとの間には綿をはじめ繊維の取り引きが盛んであったが、一五、六年前から次第になくなり、現在神戸で繊維関係の仕事に従事している人は殆んどいない。インド人が経営している会社は、神戸、大阪で約百五十社だが、その内訳は繊維が60パーセント、真珠が20パーセント、雑貨、自動車、電器関係などが20パーセントとなっている。神戸ではジャベリーさんのように真珠関係の仕事についている人が80パーセントを占めている。

一九三七年、神戸にインド商工会議所が設立された。現在、事務所は大阪へ移ったが、パテラさんは一九六九年にここの会長を勤めた。

◇

長らく神戸に住んでいるパテラさんだが、その間の移り変わりで特に目についたのは、建物の変化、人間の変化だという。特に人間の変化については、「昔はお互いにあつい気持ちがあって、商売の取り引きをやっていても友だち同士のようなつき合いだったのに、今は冷たくなりました。商売にしても本当にビジネスだけのつき合いになってしまった」といささかさびしそうな様子。

「人間は、昔は神さんに信用があったんですが、今はなくなりました」とおっしゃるパテラさんは敬虔な宗教徒でもある。毎朝自宅の仏壇に礼拝してからその日一日が始まる。牛肉、豚肉は今でも食べない。「私は神さんを一番大事にしている」そうである。



素晴しいインドの婚礼衣裳

◇

ジャベリーさんは山の好きな人であるが、パテラさんもまた山が好きだ。特に布引、再度山が好きで、昔は朝の五時頃から毎日山登りをした。神戸は山がきれいで、グリーンが多く、空気のきれいなまちだというパテラさんは今でも休みの日には朝早くから山へ散歩に行く。健康のためには一番ですね、ということだ。

現在、神戸に住んでいるインド人の殆んどは戦後神戸へやって来た人たちだが、在神インド人のなかで最も長く住んでいるひとりであるパテラさんには、神戸に大被害を与えた水害の記憶が今でも鮮明に残っている。あの当時は一週間から十日間ほどロクに食べるものも食べられなかったということで、道路整備もやったけれど一月位はきれいにならなかった。そのとき、山も崩れたのだが、その前日もパテラさんは山へ出掛けていて、もし、その日も雨が降らなければ行くところだった。「それ以外には楽しかった思い出しか残っていませんね……」。

高槻市には Nippon Vedanta Society と宗教機関がある。会長は日本人であるが、副会長をパテラさんが勤めている。ここでは、インドで旱魃が起ったら寄附金や救援物資を集めて現地へ送ったり、日本でも台風などで被害の出たときには救援活動を行って活躍している。

◇

死ぬまで神戸に住みたいというパテラさんは、神戸以外には旅行をした別府や箱根も好きだそうだが、本当に神戸が好きな様子である。また、日本料理も好きで、スキ焼きや鉄板焼き料理を家族揃って食べに行ったりもする。

ちょうど、パテラさんのお宅へ伺った日は第五回神戸まつりの当日。インドチームも途中とぎれたこともあったが十年間パレードに出場している。ジャベリーさんは花自動車に乗ったこともあるそうだし、パテラさんのお嬢さん Hemlata さんもみなとまつりの頃、花電車にプリンセスとして乗った。そのせいかパテラさんにとっては今の神戸まつりよりも、みなとまつりの方が面白かったらしい。

◇

日印両国の親善、友好と相互理解を深めるために一九六九年七月七日、日印文化協定締結を記念して「神戸日印文化協会」が発足した。常任理事の桑原泰業さんが切り盛りをしていて、事務所は東極楽寺内（葺合区）にある。現在、会員は二百名ほどで、インド文化の知識高揚を図るため、文化交流、研究を促進し日印両国の相互の理解と親善に寄与することを目的としている。そのための事業として、インド文化に関する理解と普及のための研究会、講演会、展覧会、映画、音楽会舞踊会、日印両国の親善をはかる集会の開催など各種の事業を行っている。毎月第四金曜日には会員が集って会合をもっている。

桑原さんによると神戸にある各国の協会のなかでも、この神戸日印文化協会は最も活潑に動いているということである。

ともあれ、日本とインドとの交流は仏教一つをとってみても過去から現在まで連綿と続いているのである。そのような両国の深いつながりのなかに、私たちは今日も道行くインド人の姿を見るのである。

◇女流邦楽の第一人者
大和美代葵、珠玉の名集大成！

大和楽全集
名曲の流れ

三弦／大和久満

「大和楽」とは日本の伝統音楽のエッセンスをとり出し、それに現代的な感覚の発声に衣をまとわせ人々に愛唱される様式を試みる新楽派です。

●河／たけくらべ／一葉／祭／あやめ／江島生島他

●発売日　五月二十五日　●定価　二〇、〇〇〇円
30㎝盤ステレオ　十枚組〈CLS・5182～91〉
●豪華布貼りカートン・ケース入り

別冊和とじ唄本（歌詞）、解説書付

コロムビアレコード
●ご予約はコロムビアレコード特約店へ

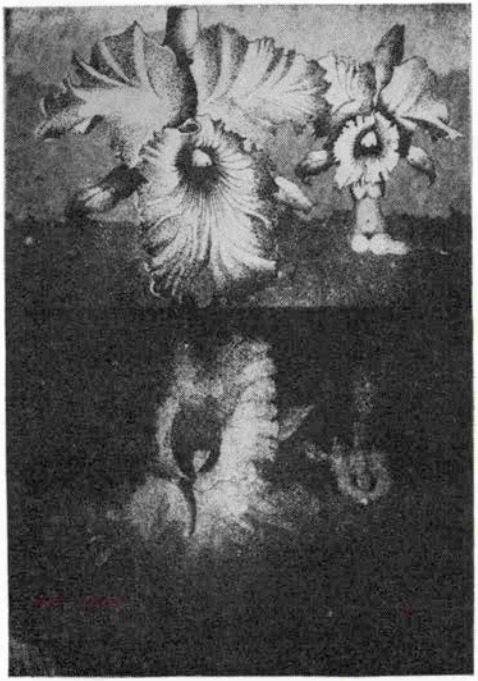
潜り戸を通って
“花„のおふくろさんの味を

●こん立て●
たかのり弁当
やよいの里
花そうめん
みむろそうめん
天ぷら
おつくり
木ノ芽和え
玉子どうふ

和風季節料理　花

11：30A.M.～8：00PM.　月曜日定休
さんプラザ地階　☎ 331－0087

SALON
KOBEJIDAI



〝神戸時代〞ちょっと変った名前ですが、新しい神戸時代を目指した神戸っ子のサロンです。

神戸で最もファッショナブルな北野町、山本通界わいのファッショナブルなサロン――〝神戸時代〞

神戸っ子の憩いの広場であったり、談論風発のサロンにもなり、ミニパーティがひらかれたり、ミニ発表会が行なわれたり素晴しい情報交換の場になります。

その神戸時代で、壁面を利用して、SALON 神戸時代ギャラリーを開いております。石阪春生先生の素描展に続きまして、松本宏先生のエッチングと水彩の作品をかけさせていただくことになりました。おさそいあわせご鑑賞くださいますようご案内申し上げます。

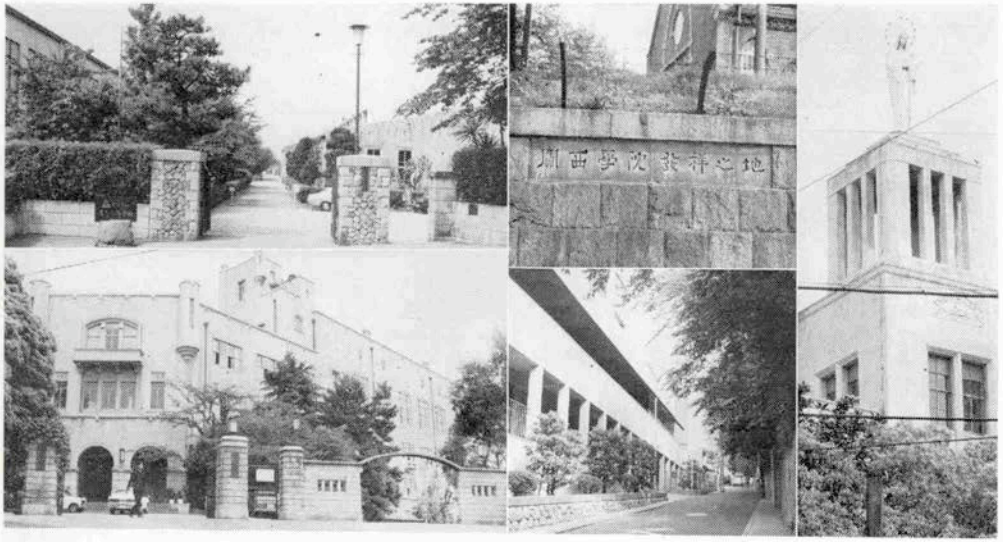
SALON
神戸時代ギャルリー

松本　宏

エッチング・素描展

6月5日→7月5日

SALON 神戸時代
神戸市生田区中山手通1丁目28
モンシャトーコトブキビル1F
TEL. 242−3567



左より（上）葺合高校／関西学院発祥地／海星女学院（下）神戸高校／松蔭女子短大

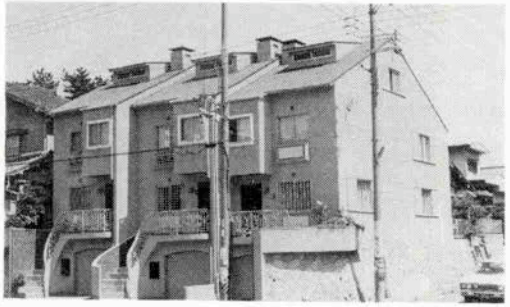
□学校街、学園町といったところを、神戸の町の中からとりあげてみるとしたら、東から甲南女子大学・女子薬科大学・甲南大学の一帯、神戸外大・神戸大学・六甲高校の六甲台、神戸高校・海星女学院・松蔭学園・葺合高校の青谷周辺、神港中高校・山手、諏訪山両小学校・生田中学校・親和女子学園・神戸大学医学部の生田地区、夢野台・兵庫・長田高校などの兵庫・長田地区、神戸商大・星陵・神戸商業・垂水中などの垂水地区、といったところでしょう。このうち、東の本山地区と六甲台地区、西の星陵台地区の3地区が、都市計画の文教地区に指定されています。

□学校街特有のにぎわい、ということからいったら、青谷地区ではないでしょうか。立地的にみて、ここは三宮と六甲をつなぐ青谷回りのバスと一体となった沿道町のまさに焦点になっていることと、お隣りに王子公園があることが、町の動きと環境に強く作用しています。学生や生徒の行動も、三宮〜六甲のヨコの動きと、国鉄灘駅・阪急西灘駅と山麓をつなぐタテの動きの重なりに表現されています。

□本山や星陵台と違って、ここの学校街は、街並として、連続しています。学園ごとのオープンスペースや広場と四季とりどりの色合いと味わいをみせる、大きな樹影の間を散策していくことの楽しみがあります。そして、それぞれの学園の門構えや囲み塀にも、その学園の個性が感じられます。学舎の色々なたたずまいは、その学園の歴史を伝えてくれます。王子公園、ハンター邸、その南の近代美術館なども含めて、町に開いた学校街、1つのキャンパスとして存在しています。

エビス・ホーム《タウンハウス⑤》神戸のモダーンリビング㊼

——水谷頴介＋チーム・UR



（左上）エビスホームのスタート作品
（左下）すぐ南を走る阪急電車と道路からプライバシィを守るための塀をもったエビスホーム
（右）傾斜地にガレージをつけたエビスホーム

□今回は、神戸におけるタウンハウスのしにせ、エビスホームのいくつかをとりあげてみました。エビスホームは、最近ではかなりあちこちに群として建てられているのですが、これは御影地区での、ごく近隣の3つです。

□エビスホームの基本的性格は「阪神間的だ、やはり阪神間生れだな」ということでしょう。いわゆる阪神間の郊外住宅地のなかに、周囲の環境と対立することでなく、あてはまっていることです。黒い瓦屋根、板壁の和風、例えば、日本のタウンハウスの典型である大阪の長屋や京都の町屋とは違って、赤瓦、モルタルかき落としの壁を基調としています。この基調を守って、エビスホームは、最近、関東平野、吉祥寺や横浜に進出して建てられているのですが、周囲の町との調合は、それぞれの町の人々からどう評価されているのか、聞いてみたいところです。神戸のお店が進出して、東京で人気があるように、エビスホームの遠征は、歓迎されているでしょうか、どうでしょうか。

□まず、阪神間の従来の郊外住宅地の住宅と、根本的に異なる条件があることに対して、このタウンハウスが積極的に対決していない点だけが、気がかりになっていました。それは、敷地の条件、住戸の外部空間への配慮です。従来の1戸建の敷地に比べて、せまくなった敷地にもかかわらず、たとえば、低い生け垣や金網程度の外構です。この点では、高い坂塀で囲まれていて、裸でお庭の盆栽の手入れのできる大阪の長屋や、立派な中庭のある京都の町屋の領域には、勝負できていない様です。また、前の道路と住戸の内外空間を積極的に交流させるヨーロッパでのロウ・ハウスの南入り玄関口などの取り扱いが、試みられていません。こういった手法で、1階にお店やアトリエの仕事場をとりこみ、タウンハウス本来の住職共存、といった事例が、まだ存在していないのです。

□神戸を福祉の町に〈18〉

愛の手運動と神戸っ子

里親をさがして14年〈上〉

橋本　明
〈社団法人「家庭養護促進協会」事務局長〉

子どもを生んでおきながら育てようとしない親が増え、家庭から放り出された子どもたちが街の中に捨てられたり、母子心中をするという悲劇が新聞の社会面をにぎわすことが多くなってきたように思う。こうした壊れた家庭や親子の問題に地元の神戸で14年間にわたってとりくんできた「愛の手運動」（里親さがし運動）の活動を三回にわたってご紹介したい。

楠公さんの西門のすぐ前、神戸市総合福祉センターの二階に「社団法人　家庭養護促進協会」という名前の書かれた小さな部屋がある。名前を見ても一体何をやってる団体なのか、かいもくわかりそうにないが、実はこれは日本でも他に例をみないほど大変ユニークな方法で里親（さとおや）をさがしつづけている、日本でたったひとつの民間の里親開拓機関なのである。お役所の建物の中にあるのでお役所の事務所かとよく感違いされるのだがどうしてどうして、純然たる民間の福祉機関である。

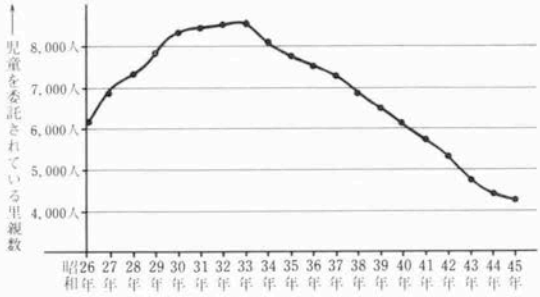
「里親」といっても何のことかわからない人も多いかと思うが、簡単に言えば、いろいろな事情で実の親の手で育てられない子どもたちを引きとって育ててくれる人たちのことを里親といっている。そして里親さんの家庭で生活している子どもたちを里子（さとご）という。

こう書くと、「へェー、いまごろ他人の子どもを引きとって育てようという奇篤な人があるんかいな」と思われる人もあるだろうが、実はそれが数は少いがちゃんとあるのである。

わたしたちが一生懸命になってこの里親家庭をさがしつづけているのにはそれなりのいろんなわけがある。

そのわけの第一は、まず、いままでのお役所の児童福祉行政というものは、家庭からはみ出した子どもたちをすべて施設へ収容してしまうという、通りいっぺんの画一的な方法しか考えられておらず、子どもの状態によって14種類の施設（助産施設、乳児院、母子寮、保育所、児童厚生施設、養護施設、精神薄弱児施設、精神薄弱児通園施設、盲ろうあ児施設、虚弱児施設、肢体不自由児施設、情緒障害児短期治療施設、教護院、重症身心障害児施設）に分類して収容、治療するという考え方が一般的であったし、今でもそうである。わたしたちが里親

さがし運動を始めたのは、こうした集団の施設収容一辺倒から脱却して、家庭のない子どもたちには施設よりも代りの家庭を与え、生みの親に育てられない子どもたちを代りの親によって育ててもらおうという考えからである。この考え方の根底には、子どもは集団の施設よりも一般の家庭の中での方がよりよい成長、発達をとげることができる、という理念がある。とくに乳幼児期の生活環境はその人の一生を支配してしまうほど大切だとされ、その頃緊密な人間関係をもたず、十分な愛情をそそがれないで育つと、社会的にも情緒的にも不安定な性格の人間に育ってしまうといわれている。こういう点を考えてみると集団の施設が一概には悪いとはいえないが、現在の保母や指導員の定数、施設の構造、労働条件などからみても決して子どもの健全な成長にとって最良の環境となってはいない。施設というものは大きくなればなるほど、また職員の労働システムが合理化されればされるほど、施設は統制され、管理化されてくる。子どもを育てるということは養鶏のように管理されたシステムの下で能率的に大量生産するのとはわけが違う。ひとりひとりの子どもはみな個性的であり生まれた環境、生育歴、身体の状態、もっている問題などがみな違う。そういう違いをひとつひとつ踏まえたうえで子どもを育てるということは集団の施設ではなかなか難しいことだし、家庭における親子関係のような絆は施設では形成されにくい。家庭からはみ出した子どもたちを施設ではなく、一般の里親家庭で育てたいというわたしたちの考えはここにあり、家庭の結びつきを失なった子どもたちに代わりのお父さんやお母さん、きょうだいたちをみつけ、家族の一員として暖かい愛情にはぐくまれながら子どもを育てていこうというのがこの里親さがし運動のネライである。しかしわたしたちの運動は決して施設に対立するものではなく、ある子どもにとっては集団の施設での生活の方が向いており、またある子どもにとっては里親家庭での生活に向いているというふうに子どものいろいろな条件や問題によってそれぞれ適当な生活環境を与えていくという方針はもっている。ただ今の日本の現状をみるとあまりにも集団施設偏重主義で、明らかに里親家庭で育てた方がよいと思われる乳幼児までいつまでも施設においているという状態を改め、バランスのとれた子どもの健やかな成長を願うために里親家庭での養育に力を入れているのである。



年次別里親の状況（厚生省報告例より）

従来わが国にも里親制度はあったが、別表の通り、昭和33年を頂点にして、子どもを預かっている里親の数及び里子の数は年々減ってきている。

現在アメリカでは家庭で育てられない子どもの72％が、イギリスでは85％が里親家庭で育てられているが、わが国ではわずか18％にすぎない。これは今までのべたようにお役所の児童福祉行政が施設収容中心主義であり、里親開拓も児童相談所だけがその窓口であり、里親希望者が申込みにくるのをただ待っているだけ、といった消極的なものであったため別表のように伸び悩んでいる。こういう状況のなかで、親といっしょに暮せない子どもたちを引きとって育ててくれる里親家庭を何とか地域のなかに見つけ出して伸ばしていきたい、という願いからわたしたちは今から14年前の昭和36年に、今までの日本ではまだ前例のない、新しい里親さがし運動の大キャンペーンを展開することとなった。

〈つづく〉

● Fashion Life in London ③

女王陛下のカクテルパーティ

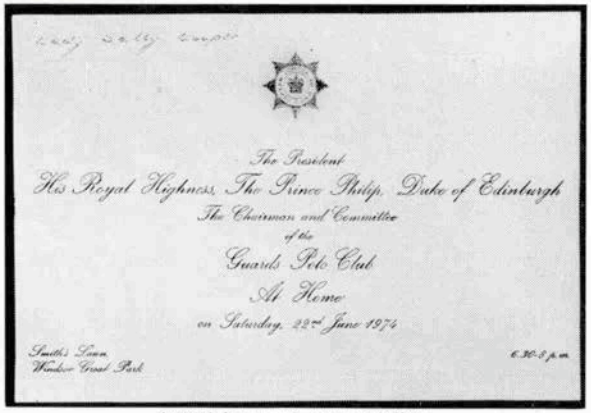
柴田 啓嗣
〈柴田商事㈱企画室長〉

六月。ある日、風のように舞いこんできた一枚の招待状。エリザベス女王主催のカクテル・パーティへ、それは私たちを招いたものだった。六月二二日。会場はウィンザー城東方のバージニア・ウォーターにあるグレート・パーク。世界中で最も見識の高いといわれる英国王室が一般庶民と親しく交わる、それが女王陛下のカクテル・パーティだった。

■ロイヤル・ア・ゴーゴー

今度の来日でさわやかなクィーン・スマイルが、日本の行く先々の人々に歓迎されたエリザベス女王は、本国のイギリスでも大変な人気である。女王ご夫妻、チャールズ王子、アン王女など親しみやすいご一家は、ロンドン子たちのアイドルだ。

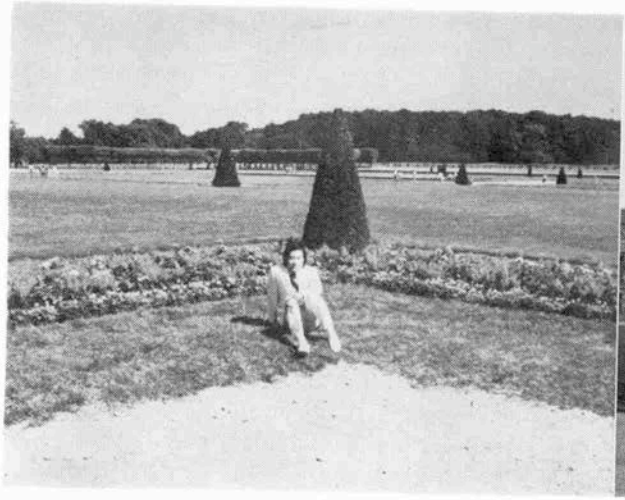
福祉国家で、ロンドンではコジキにお金を与える必要などない。彼らは夜になると、タキシードに着替えてお酒を飲みに行くぐらいなんだから——といわれるほど暮らしやすく、福祉の行きとどいたイギリスだが、今でもコンサートや映画の初日は皇室主催のチャリティになることが多い。それには皇室の人々も顔を見せる。それがクラシックコンサートに限らず、ポップやロックのコンサートでも同じこと。そんなことも人々に親しまれる原因になっているのだと思う。

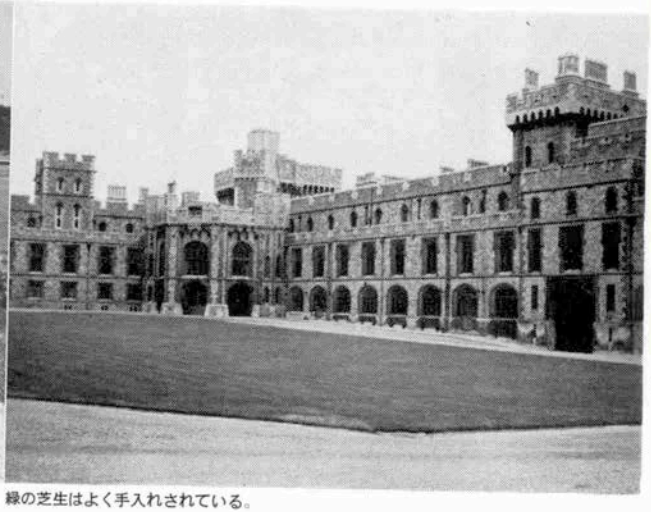


女王のカクテル・パーティへの招待状

さて、アン王女主催によるエルトン・ジョンのチャリティ・コンサートがロイヤル・フェスティバル・ホールで開かれた。ロイヤル・フェスティバル・ホールは日本ならさしずめ国立劇場といった格調あるコンサート・ホールである。ロイヤル・ボックスにはアン王女はじめ皇室の若い連中が姿を見せ、会場にはダークスーツとロングスカートの紳士淑女と長髪にジーンズのヒッピーたち。全員起立しての国家吹奏のあと、舞台に現われた今をときめくエルトン・ジョン。ブルーのサテンのガウン、白のシャツにジーンズ、ブーツをはき、大きなサングラスをかけた奇想天外なファッション。彼は衣裳を取っかえひっかえ、二時間ぶっつづけに歌った。ピアノから煙を出してみせたり、逆立ちして弾いてみたり、ヒット曲を次々歌いまくり会場を魅了していた。踊っている者もいる。〝ダニエル〟〝ルーシー・イン・ザ・スカイ〟……。

最後の曲が終わり幕が降りても、まだ興奮のさめない会場は全員立ち上がり、手をたたいて彼のアンコールを促した。再び舞台に上ったエルトン。アンコールの曲には会場全体がゴーゴーを踊り出した。見るとロイヤル・ボックスのロングドレスの女性まで踊っている。これに





ヨーロッパの公園は整然と美しい。緑の芝生はよく手入れされている。

は隣りにいた友人のイギリス人も少しびっくりしたようであった。

■ガーズ・ポロクラブでのパーティ

私の一生の思い出となるべき女王陛下のカクテル・パーティ。それはイギリス、フランスなどから政財界の代表二百人を集めて毎年開かれるもので、私がトレーニングを受けていたドーメル社社長が、ロンドンの社交界で確固たる位置にあったので招待されたというわけだ。公園の中央にあるガーズ・ポロクラブ。婦人の真白のロングドレスが新緑の芝生にすばらしく映える。公園を取り囲む衛兵たち、ショファー（運転手）の控えるロールスロイスがずらりと並び、永遠に続く緑の森、澄みきった青空……イギリス美人がサーヴィスしてくれるシャンペンはとびきり上等で、ヨーロッパ各国の美女たちに囲まれ、夢をみているような幸せな気分……紹介したりされたり、あちこちで話に花が咲いている。

パーティは最高潮に達し、女王はご都合により残念ながら欠席されたが、チャールズ王子が驚いたことにポロのユニホーム姿でさっそうと登場した。王子は私たちに、誰かれとなく気さくに話しかけられた。この日の、彼を囲んでのシャンペンの味を私は忘れることができない。

このパーティに出ることを、私はテニスのパートナーであった友人ひとりにこっそりと告げただけであった。下宿の家族にも何も言わなかった。ところがパーティがあって二、三日すると、私の住んでいたストゥレタム中でこのことが大騒ぎになった。親しくしていなかった人たちが、それからは「家でパーティをやるからぜひいらっしゃい」と私に声をかけてくれ、あちこちにひっぱりダコ。下宿の夫婦は私のことで鼻を高くして「ウチには日本のプリンスが下宿しているんだ」と大いばり。こういったことは、階級差別の厳しいイギリスで、私の予想しなかったことであった。その後は仕事の席でも初対面の相手とスムーズに話が運ぶようになり、私のロンドンでの生活は厚意的に迎えられたのであった。

をめぐる神戸っ子達

九重　喜久野さん〈染色家〉

この人の前でチョッと私は緊張気味になった。強い個性を感じたからかもしれない。さすが芸術に打ち込む人だなァと思った。

古沢　昭一さん〈市会議員〉

市議は〝ドブ板議員〟でなければならないと説く。市民の身勝手な訴えでも親切に聞かねばならんだろうなァと私は思った。私のような面倒臭がりはとても勤まりそうもない。

柴山　啓之さん〈前「雪」編集長〉

暑いのに制服を着てくれた。消防局の待機室である。いつ会ってもおだやかな友情で接してくれる。立派な制服を着てもいつもの柴山さんの表情は変わらない。

小泉　康夫さん〈月刊「神戸っ子」編集長〉

能面をじっと見ていると色々な事を考える。不気味に見えたり、優しく見えたり、恐ろしく見えたり。この人の顔はそんな顔だ。能を研究しているからかな。「そないい言うたらわしは悪者みたいやないか」と笑う。

西　重敬さん〈新須磨病院長〉

患者に献身的であることは、私の家族がみんなお世話になっているのでよく知っている。『少年の頃から医者になりたかったんです。医者は長生き出来ないと言いますが、それでも精一杯つくしてあげたら本望です』立派だなァ。

鍋島　一夫さん〈西浜運輸興業㈱代表〉

中西勝さんのお友達である。私よりずっと若いけれど、私の方が貫録負けである。

東浦　好洋さん〈画家・光風会会員〉

光風会を皆さんにもっと認識してもらいたいという。『光風会って何の会ですか』と言われるのにガッカリしています『PRは正しい認識をしてもらうということですからドンドンやらはったらどうですか』『そうですね』

竹田　達さん〈市会議員〉

『市議選に立候補されるそうで』『ハイよろしくお願します』がっちりした体、しぶい顔、佐藤栄作さんに似ている。

をめぐる神戸っ子達

谷口　正雄さん〈写真家〉

スタジオ開きに招待された時、谷口さんの頭を遠慮なく誇張して描いたらみんながドッときた。谷口さんも一諸になって笑っている。

松下　元夫さん〈画家・二紀会〉

神戸新聞の図案課へ私の欠員補充で入社した彼であった。もう15年、一人前になっている彼が私のインスタントなレタリングの上達法?を教えたことを15年過ぎた今でも"恩義"に感じていてくれていた。嬉しいじゃないか。

菊川　普久さん〈彫刻家〉

非常に礼儀正しい人柄である。彫刻家であることを知らなかった私だった。が、作品を見せてもらって中西勝さんが推選した理由を感じた。

塚原　久見子さん〈ローランサン〉

『先生、二重アゴを描かんといてね』という。私は『その二重アゴが好きなんやけどなァ』といって消した。『先生それ……またあとで描くんでしょう』とにらまれた。

ご自分では〝優しいようでキツイ顔に見えるんです〟とおっしゃる。ご自分がわかっていらっしゃるということは優しい心があるからです。優しい顔じゃありませんか。

岩田　弘三さん
〈レストラン・フック神戸店〉

松本　幸三さん〈声楽家〉

誰にでも可愛いがられる人だと思いました。善意が表情を造っている。この人の歌はやわらかく心に触れてくる。歌は心で歌うものといわれるが、ホントだなァ。

鉄山　善康さん〈すし鉄〉

私の大ファンであり、阪神ファンである。元阪神の村山投手がお忍びで来ていた店。引退試合のとき彼の息子が花束を渡している写真が飾ってある店。『もうさん元気が出るでー』と、いつもアワビのワタを食べさせてくれる。

福岡　康年さん〈アフリカスペシャリスト〉

手品はプロ級。この間、アフリカを手品で旅して、悪魔じゃないかと恐れられて、命が危なかったとか。自分をグッと押し出せない。世渡りの〝手品〟は下手くそだ。だから私はこの人が好きだ。

★神戸っ子愛読者サービス特別トラベル企画

1 〈バンコック4日間〉
¥145,000を¥10,000に
（定価）　（愛読者サービス料金）
6月21日（土）～6月24日（火）
コース／大阪バンコック→大阪
★毎朝食と到着日のディナーショー及び観光日の昼食付

2 〈香港4日間〉
¥118,000を¥78,000に
（定価）　（愛読者サービス料金）
6月28日（土）～7月1日（火）
コース／大阪→香港→大阪
★全行程3食付マカオを日帰り観光を含む

3 〈シンガポール・香港5日間〉
¥185,000を¥108,000に
（定価）　（愛読者サービス料金）
8月23日（土）～8月27日（水）
コース／大阪→シンガポール→香港→大阪
★毎朝食及びシンガポール・香港到着日の夕食付

4 〈ハワイ6日間〉
¥176,000を¥138,000に
（定価）　（愛読者サービス料金）
9月11日（木）～9月16日（火）
コース／大阪→東京→ホノルル→東京→大阪
★到着日の昼食のみ

5 〈ハワイ6日間〉
¥176,000を¥120,000
（定価）　（愛読者サービス料金）
12月11日（木）～12月16日（火）
コース／大阪→東京→ホノルル→東京→大阪
★到着日の昼食のみ

上記の特別企画には　月刊「神戸っ子編集部」トラベル係までお申込みください。TEL078（331）2246　小泉

海外トラベルへのお誘い

ヨーロッパツアー

11月1日(土)～11月9日(日)10日間

①コース
パリフリーコース
¥ 198,000　募集人員60名

②コース
パリ・マドリッド・ローマコース
¥ 278,000　募集人員40名

申込締切　50年9月30日(火)

①コース行程
東京→パリ（市内観光）（OP 4）→東京
OP 1 蚤の市・ベルサイユOP 3 シャルトルの寺院とロワール河の古城
OP 2 パリナイトショー　OP 4 モンサンミッシェル 1泊旅行

②コース行程
東京→パリ→マドリッド→ローマ→東京
パリ市内観光及びパリのOP 1，OP 2
OP 5 マドリッド、ローマの旅
マドリッド市内観光及びローマ市内観光

お問合せ／月刊神戸っ子トラベル係
(078)331－2246

（運輸省登録一般第2号）
取扱旅行代理店
日本旅行
お問合せ／神戸海外旅行センター
TEL (078) 321－4531(代)
旅行業務取扱主任者 小林雅基　担当者 半田・谷岡

東アフリカ・サファリへの旅 エスコート／福岡康年〈アフリカスペシャリスト〉

行　先：ケニヤ・タンザニヤ
期　間：昭和50年12月26日～昭和51年1月11日〈17日間〉
総　費　用：¥650、000.—
募集人員：12名（サファリ・バス2台に分乗）
エスコート：2名・福岡康年（アフリカ・スペシャリスト）TEL：078（691）5386
島村　均（ドッドウエル）
申込締切日：昭和50年10月31日（金曜日）（但し定員12名に達し次第、締切らせて頂きます）
申込方法：上記月日までに申込金5万円を添えて下記にお申込みください。
申込先：ドッドウエル　トラベル　サービス
大阪営業所
大阪市西区靭1丁目102辰巳ビル1階
TEL：06（443）8722
東京営業所
東京都千代田区丸ノ内1—4—1仲28号館
TEL：03（211）2141内線754

《日　程　表》

IT5SR3DO91

日次	月日（曜）	地名	時刻	交通機関	摘要
1	12月26日（金）	東京発	17：35	SR-311	午後3時30分　東京国際線スイスエアーカウンター前集合
2	12月27日（土）	ボンベイ着	00：45		ボンベイ市内観光（比類の塔、インドの門など）〔ボンベイ泊〕
3	12月28日（日）	ボンベイ発 ナイロビ着	08：00 13：00	EA-125	アフリカの玄関ナイロビ。羽田からの出発準備〔ホテル 680泊〕
4	12月29日（月）	ナイロビ			午前：市内観光 14:00—18:30　ナイロビ・ナショナルパーク・サファリ〔ホテル 680泊〕
5	12月30日（火）	ナイロビ発 ツアボNP着	08：00	サファリバス	センバやロードを3時間。ケニア最大のナショナルパーク　ツアボ・ウエストー　2万頭の象で有名です〔ツアボ泊〕
6	12月31日（水）	ツアボNP発 アンボセリNP着		サファリバス	ツアボを抜け、キリマンジャロのふもとにあるアンボセリ・ナショナルパーク。サイ、象、キリン、ライオン、チーターなどが見られます。〔アンボセリ泊〕
7	1月1日（木）	アンボセリNP発 レーク・マニアラNP着		サファリバス	キリマンジャロから見る初日の出を見た後、タンザニアのマニアラ湖へ。バッファロー、象、水鳥リライオンなど　〔マニアラ湖泊〕
8	1月2日（金）	レーク・マニアラNP発 ゴロンゴロクレーター着		サファリバス	ゴロンゴロでは小さな宇宙で多種の野生動物が見られます。ハイエナ、サイ、ライオン、象その他アンテロープ類〔コロンゴロ泊〕
9	1月3日（土）	ゴロンゴロクレーター発 セレンゲティNP着		サファリバス	早朝：クレーターへジープでくだる　昼食後、大平原セレンゲティへ。ヒヨウ、ライオンなど　〔セロネラ泊〕
10	1月4日（日）	セレンゲティNP発 マサイマラ着		サファリバス	セレンゲティを抜け、再びケニアへ。ケニアの中でも動物の種類の豊富なマサイマラへ。〔マ　ラ泊〕
11	1月5日（月）	マサイマラ発 ナイロビ着		サファリバス	マラGRを北へ、ケーロックをへて、ナイロビへ〔ホテル 680泊〕
12	1月6日（火）	ナイロビ発 アバディアNP着		サファリバス	密林の中にあるホテルで、すぐ下の水のみ場にやってくるいろいろの動物が見られます〔じ・ア・ク泊〕
13	1月7日（水）	アバディアNP発 ナイロビ着		サファリバス	朝、アバディアを出発、ブラミンコで有名なナクール湖をへてナイロビへ〔ホテル 680泊〕
14	1月8日（木）	ナイロビ			市内観光と自由行動（ゆっくりと、世界でも一とも美しい街の一つを味わう）〔ホテル 680泊〕
15	1月9日（金）	ナイロビ発	14：45	A I-208	午前：自由行動
16	1月10日（土）	ボンベイ着	00：30		ボンベイの休日
17	1月11日（日）	ボンベイ発 東京着	01：40 13：45	SR-312	東京到着後、解散